Medical and Pharmaceutical Society for WAKAN-YAKU

II-A-25

心身症に対する桂枝加竜骨牡蛎湯
―― その情動調整作用 ――

国療南福岡病院内科[1)]，国立京都病院内科[2)]，唐津日赤病院[3)]
○松浦達雄[1)]，岡　孝和[2)]，花田基典[3)]

目的　桂枝加竜骨牡蛎湯は、その適応として神経衰弱・ヒステリー等が掲げられ、心療内科領域でも自律神経失調症その他に頻用されている処方である。

その証として、心理面では七情の内でも〝驚〟が重視されているが、心身症領域ではどうであるかを桂枝加竜骨牡蛎湯の奏効した症例について検討した。

対象　Ｓ６２．４月～６３．３月の１年間、唐津日赤病院心療内科外来患者１５６名の内、桂枝加竜骨牡蛎湯が奏効し、その証と考えられた心身症・神経症７例。（自律神経失調症、精神病領域の患者は除外した。）

結果　７例の内、女性５．男性２名。診断名は不安神経症２、恐怖症３、過敏性大腸症候群１、不眠症１であった。心理社会的検討では、多くの例に登校・出社・通院等に対する拒否状態がみられ、その根底に〝恐れ〟の感情が多く認められた。

桂枝加竜骨牡蛎湯投与により、身体症状の改善と共に、恐れ→不安→消失へ改善した例と恐れ→悲・淋・思等の他の情動へ主体が移行した例とがみられ、心理療法の併用に際して興味深い点であった。

腹証でも、臍上下の悸は少なく腹直筋拘急を伴う者が多くみられた。

考察　対象患者の心理社会的検討からは、環境への過剰反応の結果としての気血両虚→心身衰弱→環境不適応への恐れ→出社・登校拒否として受診した者が多く、むしろ情動面で主体となる感情は〝恐〟である可能性が考えられた。

恐は驚と共に、五行では腎に入り、腎虚の１つの表われであると考えられる。桂枝加竜骨牡蛎湯は、夢精・インポランツ等性的症状に頻用され、腎虚にも対処できる処方であり、情動面では驚と共に心身症・神経症的な恐れの感情に使用できると考え、証の１つとして考慮される可能性が示唆された。

結語　桂枝加竜骨牡蛎湯は、心理的面では〝驚〟だけでなく、恐怖神経症等の〝恐〟を主体とした疾患にも有効である場合が多いと思われた。

NII-Electronic Library Service